

音楽科の教材研究の課題 ～中山晋平の功績から検討する一考察～

Problem of the Teaching Materials Study of the Music Department — One Consideration to Examine from an Achievement of Shinpei Nakayama —

(2015年3月31日受理)

小野 文子 廣畑まゆ美
Ayako Ono Mayumi Hirohata

Key words : 唱歌, 童謡, 中山晋平, 現代の音楽教育

要 旨

我が国の伝統音楽に対する理解を深めることが学習指導要領の中で提唱され、久しく時間がたった。実際教科書には掲載されて、授業で取り上げられているケースも目立つ。しかし未だ学校教育は西洋音楽に立脚しており、限られた時間の中で効果的な授業が行われているとは言い難い。中山晋平は作曲家でありながら、音楽教育に注力した偉人である。彼の優れた観察力により、日本特有のメロディやリズムが生まれ、多くの人に愛される楽曲が教育の現場をはじめ社会全体に広まった。変わりゆく時代の中で、何が必要とされているのかを探るとともに、それを教育の中で実践していくにはどのような方法で取り組めばよいかを考察する。

研究の動機

中山晋平はカチューシャの唄など、大衆音楽を興隆させた人物として名高いが、作曲家として名声を獲得する前は小学校教諭として教壇に立っていた。現場の子供たちと日々関わることで、ニーズを敏感に察知する力がこの時期養われたと考える。1918年創刊の『赤い鳥』から始まる童謡運動にも積極的に参加し、野口雨情や西條八十と組んで、現代でも歌い継がれる数々の名曲を残している。大正期のこのような運動は、それまでの唱歌教育に対する反抗的な精神から生まれたものととらえられることもあるが、(中山は「もみじ」「ふるさと」などの唱歌の制作で知られる高野辰之とは完全に打ち解けることができない関係であった)、現場で起こっていることを的確にとらえ、こどもの音楽を作った中山は、時代をどうとらえ、何を後世に伝えたいと考えていたのだろうか。同時期の作曲家の中でも特徴的な働き方をしている中山の功績は実に興味深い。「明治～大正期における音

楽の時代の関連から考察する近年の音楽」(小野・廣畑2014)において彼の活躍を振り返ったが、社会から求められていること、対象者が求めている視点に目を向けて考えることができる人物であると考えられる。

このように音楽界、音楽教育界に大きな影響をもたらすような動きが近年は少ない。2008年9月改定の中学校学習指導要領、2009年12月改定の高等学校学習指導要領において「音楽文化についての理解を深め」という一文が設けられ、我が国や郷土の伝統音楽に対する理解を深め、我が国の音楽文化に愛着をもつとともに諸外国の音楽文化を尊重する態度の育成を重視することが掲げられている。国際化が進展することを見越しての導入など、社会の動きに合わせた施策が講じられている。しかし、それが社会的な動きや新しい教材開発につながっているとは言い難い。日本の音楽教育は他教科や世の中の動きとの連動が少ないことを指摘する声もある。

中山が新しい音楽の在り方を模索しながら唱歌に代わるものを目指した過程を探り、社会のニーズと音楽教育

の関係調べるとともに、現代における音楽教育にはどのような次の一手が必要であるかを検討してみたい。

【1】中山晋平という人物について

中山晋平（1887～1952）は音楽家の中でも少々異色な経歴を持っている。長野から上京し、早稲田大学で教鞭をとっていた島村抱月の書生として働きながら、東京音楽学校に通っていた。その頃、島村抱月は坪内逍遙とともに文芸協会を設立し新劇運動を始めた。⁽¹⁾ 松井須磨子との不倫により島村は文芸協会を辞め、松井は研究所を退所させられたが、その後劇団「芸術座」結成し、トルストイの小説を脚色した「復活」が話題となった。その劇中歌で使われた「カチューシャの唄」⁽²⁾を中山が作曲した。大変な人気を博し、中山は大衆音楽の礎を築いた。その後、小学校教員となり教壇に立つ傍ら作曲活動を行っていた。大正初期に起こった童謡運動に加わり、野口雨情や西條八十の詩にメロディをつけ200曲以上の童謡を世に送り出した。民謡など人々の生活の中で育まれた独特なリズムや音階にも着目し、民族学者の柳田國男とも交流があった。その後生活が忙しくなり、小学校教員を辞め、ビクター専属作曲家として雇われの身となった。コロンビアの古賀政男に並び一世を風靡し、第一回紅白歌合戦の審査員も務めている。豊富な経験から世の中では何が起きているか、歌を實際歌うであろうターゲット世代が何を考えているのか、歌いやすい音域は何かを考察する力に長けていた。

流行歌を興隆させたことの方が中山の功績として大きく称えられることが多いが、彼の童謡に対する思考や工夫は興味深いものがある。中山も「赤い鳥派」⁽³⁾の一人として名前があがってくる人物である。鈴木三重吉の提唱から、北原白秋、西條八十、成田為三、弘田龍太郎など多くの詩人、作曲家が童謡制作に向き合ったが、その中に中山晋平もいた。子供を重視する活動方針に共鳴する一方で、郷土性を重んじる歌詞にも共鳴を受けて幅広い制作を行っていた。中山は童謡を制作するにあたり以下のような言葉を残している。

童謡の作曲をする人は何よりも先ず以て「子供」の親友であるべきである。子供を知らずして子供に親しみの

ある歌曲の出来よう筈がない」⁽⁴⁾

中山は明治政府の唱歌教育が、日本の伝統的な風景や感性を表しているものであることは理解していたが、人間の自然な感情（喜び・悲しみ等）と無縁であることに気付き、懸念していた。中山がまだ代用教員時代だった頃、子供たちに唱歌を指導していた際、メジャーの歌でもだんだんとマイナーになってくることに気がついた。子供の歌の特徴から日本人の体内に宿るセンチメンタリズムの原始性を垣間見たのである。中山はまず流行歌の制作で日本人の趣味に合った音階を試す。日本人が歌いにくい半音階を極力使用せず、唱歌風の五音音階に近づけ、日本人好みの短音階による哀愁が加わる下記のような工夫をしている。

- ・人間の自然な感情を歌っている
- ・日本人の歌いやすい音階で作っている
- ・美的意識の育成に目を向けている

俗にいう「晋平節」（四七抜き短音階）は日々の思考と観察から生まれた。最初は大衆向けの流行歌として世の中に浸透したが、より子供意識した童謡運動に加わる上でも、制作時念頭に置かれ、子供たちが自然と歌える歌を次々と作曲したのであった。

【2】これまでの教育方針を批判して生まれた童謡

1) 童謡運動の始まり

童謡運動は日本の子供たちへその生活に即した芸術を与えようという趣旨で展開された。大正7年7月に創刊された『赤い鳥』を出発点にしていた。その後、「おとぎの世界」「こども雑誌」「金の船」など次々に似たような雑誌が登場し、童謡人気は高まっていった。そもそもこの大正期の動きの発端は、それまでに実践されてきた唱歌教育に対する疑問に端を発している。大正デモクラシー的な自由主義的雰囲気文化界にも影響を及ぼし、既存の社会が生み出している価値観を問い直すような行為につながった。

音楽が教育カリキュラムの中に組み込まれたのは1900年、「学制」の中で「唱歌」とされ、「当分のヲ欠ク」（暫くは実践しなくてもよい、時期が来たら実践する）とい

う一文が添えられて設けられた。富国強兵のためのツールとして、国民の意思統一や体づくり、軍人のための絶対音感の育成を行うことが狙いであった。伊沢とともに唱歌教育の根幹を作ったL. W. メーソンは音楽教育の意義を下記のように説いている。

- ・音楽は、他の芸術教科と同じく知的訓練にもきわめて有効である。
- ・音楽は、情操教育の方便としては最適であるとともに、道徳心の涵養にもきわめて有効である。
- ・音楽は、身体的にみて音楽の訓練によって強い胸骨格を形成する点で健康的にもきわめて有効である。⁽⁵⁾

有効であることは明文化されたものの、唱歌教育に対して具体的にどのように取り組んでよいかかわからず、全国各地から問い合わせが殺到した。政府も強い国家を作るための道具程度にしか考えておらず、これから考えようとしたことが「当分之ヲ欠ク」という言葉に表されている。研究が進められ教材として使用されたものは、子供たちが歌うことへの配慮が乏しく、文語調の難しい表現が多用され、音域は高かったり、低かったり、西洋のものをそのまま移行したような内容のものであった。音楽の感性を伸ばすことへの意識は皆無であった。

一方童謡は、前章で述べた通りの特徴をもつ。作曲家や詩人が道徳主義、訓化主義に傾きがちであった明治の教育精神に対立して、子どもの現実的な生活情感を満たすための新しい詩と歌を、子供の視点や感性、体の発育等に合わせて検討していったのである。子供はもちろん、子供をもつ母親にも愛され、民衆の評判は上々であったが、これまで唱歌教育を提唱してきた教育者や文部省の役人からは「品格を欠くもの」として歓迎されなかった。学校で教えることを禁じた期間もあったが、生徒はもちろん、それを指導する教師も興味を持ち、ひそかに教材として活用する学校も増えてきた。その勢いに圧巻され、政府はしぶしぶ数多い童謡の中から数十曲を選定して学校教材とすることを認めたのであった。民衆の渴望から必要なものが選定されて教材化した貴重な事例である。

2) 童謡が音楽教育にもたらした影響

童謡は既存の価値観を問い直し、当時の社会情勢を踏

まえて生まれている。メリットは富国強兵のために利用されるものではなくなったということがひとつ挙げられる。1920年には福井直秋が児童発声研究会を開催。22年には、草川宣雄が頭声発声を提唱。小山作之助が理事長となり、日本教育音楽協会が設立され、音楽という教科が美意識を育てるものとして扱われることになった。しかしながら童謡は必ずしも唱歌に成り代わるものにはならなかった。その後32年『新訂 小学唱歌』、33年『高等小学唱歌』が発刊され、唱歌も童謡の運動に刺激を受けながらその内容が吟味されていった。平成20年8月現在の小学校学習指導要領音楽編においても1年生から6年生まで文部省唱歌が共通教材として使用されている。創作童謡は「童心性」「伝統性」「芸術性」を抛りどころとしすぎるあまり、伝統音楽の認識の希薄さや、作曲技法上の門外から、唱歌と音楽的にはそれほど変わらない童謡が多く誕生することになり、童謡は詩としての側面はともかく、音楽的には唱歌の明確な対立軸にはなりえなかったということも指摘されている。⁽⁶⁾しかし時代の流れを敏感に詩人や作曲家が感じる事がなければ、唱歌は政治的な要素を含み続け、美意識の育成等には結びつかなかっただであろう。童謡運動は教育に一石を投じたのである。

1つの事例として、戦前アメリカから友好関係の証として大量の人形が日本の子供たちに贈られた。その際人形を迎える歌として、各作曲家・作詞家が楽曲制作を行っている。文部省唱歌を担当していた高野辰之が歌詞を作っている。(昭和2年発表)しかし今日まで、人形を迎えた時の歌として歌い継がれているのは野口雨情の「青い目の人形」であることから、唱歌教育と童謡の関係が拮抗しながら、時代のニーズによって選択されていったことがわかる。

【3】現代の音楽教育

このように時の音楽家は音楽に対して常に課題意識を持つとともに、子供たちの中で起こっている変化を十分に考察して必要だと思うものを生み出して世の中に発表していた。冒頭でも述べたが今日の音楽教育では「我が国の文化」に対する理解を深めることが学習指導要領に記載されている。国際化など近い将来を見据えて加えら

れている要素である。教材として教科書には歌舞伎や箏曲、雅楽等が掲載され、一通りのストーリーを教授される。グローバルな社会として開かれた今となって、こうして自国の文化を改めて見つめなおすことに価値がおかれるようになったが（言い換えると、海外の人との交流の際、少なからず出身国の文化的な事に対するニーズがあるから）、1947年6月に発行された「学習指導要領音楽編（試案）」においては当時歌舞伎や長唄など、長年日本で生まれ受け継がれた流行歌等は軽視・排除され、西洋音楽の形式主義的に立脚して音楽教育のスタンスが作られていた。これに対し1950年5月、中山は下記のように述べた。

「流行歌の大部分は日本の民族が過去の幾世紀かを費やして彼等の言葉の上に彼等の情懷を托した民謡からその糸を引いている。総じてそうした民謡のみならず日本の歌い物には、長唄、常盤津、新内、義太夫の類から琵琶歌、浪曲に至るまで、歌われるものゝ全てにわたって西洋の音階からは生まれようもない特殊な音程があり、独特のシンコペーションを含む特殊なリズムがあり、さらには唄の生殺与奪を思いのままに左右し、聴く人のかゆい処へ心行くまで手を届かせ得る節回しと称する独特の技巧がある。こうした日本の音楽技巧にたゞ締め出しを喰わせようとしても結局徒勞に終わるしかないのだから、音楽教育が上述の如き日本的特色をあれ程までに毛嫌いせずに、適当に生徒児童の音楽生活の中に生かす方途を講じて来て居てくれたら、生徒児童の音楽生活にもつと遙に幸福な面がひらけて居たろう。」⁽⁷⁾

その時々々の教育方針によって振り回され、学びに限りが出てしまう子供たちを案じるとともに、日本の独特な節回しや、リズム、音程への面白さに着目しない排他的な制度に対して苦言を呈している。自身の見解から、政府に対しても臆することなく意見を述べる中山の姿勢は、音楽教育に対する熱意にあふれていた。

西洋音楽を基盤とした音楽が授業で中心に据えられる中で、かつて流行歌は抑制・排除された。今では教科書に掲載されて一定の授業時間を確保することができるようになったことに加え、伝統音楽に対する世の中の意識レベルが高まりを見せつつある。ただそれが効果的に扱

われているかどうかという部分ではまだ疑問に残る部分が多々ある。

『これからの音楽教育を考える 展望と方針』（山本文茂）においてもこの国際化に向けた動きに対して、必要な働きかけとして否定はされていないが、現代の音楽教育システムについての疑問が下記の通り記載されている。

- ① 学習の総合性についての希薄化
- ② 学習が表層的なレベルに留まっていないか

①について、音楽科の中の領域（歌唱・器楽・創作・観賞）の内容や活動の関連が希薄、かつ、他の教科の内容や活動とも関連がほとんどない。②については、低学年はリズム中心、中学年はメロディ中心、高学年はハーモニー中心という単純化された音楽学習の図式が定着しており、日本人の感性・美意識の育成という重大問題をほとんどないがしろにしてきているという意味合いでの疑問である。中山が懸念したことが50年以上経過した現代でも同様に懸念されていることがわかる。

文言が盛り込まれて要素が追加されても、各学年で目標は細やかに設定され、唱歌や西洋的な音階の楽曲の歌唱や観賞が授業時間の大半を占め、体制は固まっている。具体的で深い指導まで落とし込むことは十分ではない状態であろう。ただこうして古来日本の流行歌や民謡など独自の文化に目を向ける傾向は、国際化が進む社会の中で重要な役割を果たすと考える。

【4】今後の課題

中山の音楽教育に関する観点は、机上の空論ではなく、現場を目の当たりにしているからこそその臨場感があった。その時本当に必要な要素は何かを常に問い、形にして世に発表することでその必要性を国民に問いかけた。結果、流行歌、大衆歌謡、童謡などが学校などで実践される音楽教育とは少し離れたところで、人気を博し、人々に何年も歌い継がれる曲へと成長していった。

現在、訪れるグローバル社会への人材育成に向けて各学問が施策を打っている。音楽も社会のニーズに合わせて、学習指導要領の内容を改訂し、我が国の伝統的な音

楽の部分に対する意識強化を行っているものの、子供たちの実態を分析できていないのではないかと考える。中山は子供が歌う様子から、その声の中にひそむ潜在意識が引き起こすマイナー調にインスピレーションを受けて、日本人の声色に合う音楽を作ってきた。また民謡や民族文化の調査研究により次から次へと実態に即した音楽を生み出していった。社会の都合から方針や教材の選定をすることも大切であるが、子どもの興味関心を引き付けるためにできる施策も必要である。過去の偉人の言葉や手記を参考に、今後の音楽教育の在り方を一つ検討する機会となった。

注・参考文献

- (1) 新劇運動は、ヨーロッパ流の近代的な演劇を目指す日本の演劇を指す。旧劇（歌舞伎を指す）、新派（書生芝居の流れ）に対する言葉。当初翻訳劇を中心に始まり、歌舞伎や新派の商業主義を批判し、芸術志向的な演劇を目指した。
 - (2) 1914年に発表された日本の歌謡曲。ヨナ抜き音階のような伝統的な日本の音楽表現や、リード形式の西洋音楽の手法を取り入れている。
 - (3) 鈴木三重吉が中心となって創刊した雑誌「赤い鳥」の概念に共感し童謡運動を盛り上げ、詩や楽曲を制作していた作家たちの総称。
 - (4) 中山晋平「童謡及民謡の作曲に就て」『現代詩講座』第7巻 講談社 1969
 - (5) 伊東玲「音楽教育の先駆者たち～学習会・研究発表・オルガン製造・指導者～」星雲社 2009
 - (6) 石田陽子「童謡は唱歌に代わりえたか？－小学校音楽科教材としての童謡についての一考察－」四天王寺仏教大学紀要 2008
 - (7) 上田誠二「音楽はいかに現代社会をデザインしたか－教育と音楽の大衆社会史－」新曜社 2010
- 山本文茂「これからの音楽教育を考える 展望と方針」音楽之友社 2006
- アーベル＝シュトルート著、山本文茂監修『音楽教育学大綱』（原著1985 訳2004）
- 園部三郎「日本人と音楽趣味」大月書店 1977
- 菊池清麿「近代流行歌の父 中山晋平伝」郷土出版社

- 2007
- 伊東玲「音楽教育の先駆者たち～学習会・研究発表・オルガン製造・指導者～」星雲社 2009
- 文部科学省「小学校学習指導要領解説 音楽編」教育芸術社 2008
- 文部科学省「中学校学習指導要領解説 音楽編」教育芸術社 2008
- 文部科学省「高等学校学習指導要領解説 芸術（音楽 美術 工芸 書道）編」教育芸術社 2009
- R・ダグラス・グーリア「音楽学習の設計」音楽之友社 1990
- サントリー音楽財団「音楽教育大論争」株式会社ティビーエス・ブリタニカ 1984
- 和田登「小説 中山晋平 いのち短し恋せよ乙女」総和社 2005

